
はいすくっ！

神無月 あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はいすくつ！

【Zマーク】

Z0384Z

【作者名】

神無月 あき

【あらすじ】

高校生になって初めての夏。主人公ひよのは心を寄せる彼と楽しい夏祭りを過ごしたかった。

高校生になつて初めての夏。ひよのと同じクラスのはるかは心寄せる彼女と素敵な夏祭りを過ごしたかった。

お互いの目的の為、二人の少女は互いの力の限りをつくす。

舞台は夏祭り、夜店の屋台だ！

～夏祭り～ あなたのハートを今夜こそ！

「いいわね？ 次の勝負で決着をつけるわよー。」

「いいですわ！ 今度こそひよの、あなたを止めてみせますわー。」

わたしは次の屋台に目をつけると、そこに人差し指を突きつけた。

そちらに顔を向ける彼女。

そして、口の端を吊り上げた。

「なるほど、たこ焼き屋さん…………といふことは」

「そうよ、たこ焼きのー。」

「早食いつーー。」

一人同時にその言葉を発すると、同じく、見つけた1パック400円の中々リーズナブルなたこ焼き屋さんにダッシュをかけた！

「へ？ 今夜？」

午後最後の授業が終了した教室。各々の放課後の始まりに、にわかに騒がしくなった。

そんな中で、わたしは窓側最後列という学生にとっての特等席に座っている一人の男子学生に声をかけたのだった。

「そうそうー、今夜『祓木神社』でお祭りあるじゃない？ それにもしよかつたらー……一緒にいこつなあつて……ビツ?」

よつしー、すつじく自然に声掛けれたわつ！

わたしはショミーレーション通りの展開に心の中でガツツポーズを決める。

わたし『春日 ひよの』は今年長い受験戦争を経て、この『清華高等学園』に入学できたのだ。中学三年の時は、放課後は図書館で勉強して、登下校の電車の中でも参考書を読んで、海にもいかず、遊びの誘惑にも負けずに、勝ち取った高校生活！！ この高校一年は去年遊べなかつた分を挽回しようと意気込んでいたのだ。

そんな高校生活の第一回。わたしは出会つてしまつた。この『水原 拓也』に。

彼は特に飛びぬけてかっこいいわけじゃない。体格だつて中肉中背つて言葉がぴつたりのどこにでもいそうな感じ。ただ、髪とかは全然染めてなくつて、おとなしいイメージがある。特徴をあげるとするなら、休み時間になると必ずなんかの本を読んでることがな。

そんな彼に心を奪われてしまつたのは、廊下に落ちていたバナナの皮に足を滑らせて、見事なしりもちを披露してしまつた時の事、彼がわたしを起こしてくれた事がキッカケ。恥ずかしかつたけど、その時の彼の笑顔が脳裏に焼きついてしまつたのだ。

もうそれからは何をしている時でも彼の事が頭から離れることがなかつた。

だからわたしの行動は早かつた。その翌日から水原君に近づいていつて、勉強一緒にしたり、ご飯一緒に食べたりしてよく話すようになつた。だけど、友達以上にはなかなかれる雰囲気にならなかつた。何かキッカケが必要なのよね。

そんな苦悩の日々が数ヶ月続いたとき、目に入ったのが『祓木神社』の夏祭りのポスター。もう神様がわたしに『えてください』チャンスだ！ って思ったわ。

祓木神社とはわたしの家の近くにある神社で、どんな神様が祀られているのかは知らないけど、毎年七月の頭に『祓木祭』という夏祭りが行われてる。大きくはないけど、ちゃんと出店とかも何店かあつて、小さい頃から友達と一緒に遊びにいつてた。小学校の頃とかは夜出歩くなんて滅多になかったことだから、それだけですごく特別な日に感じて、ワクワクしてたもんだった。

それで今日はちょうどその『祓木祭』の日。話を切り出すには最高のネタつてわけ。

もうこの機を逃したら、また当分苦悩の日々が続くことは間違いない。学校に来る前から、何度も頭の中でどう話を切り出すかを考えまくつてた。

で、なんとかデートの話の切り出しがつまづくことなく成功。

後は水原君がオーケーしてくれるので祈るのみ!!

わたしは表面平静を装つた涼しい顔で彼の返事を待つていて、その心中では両手を握り碎くんじゃないかって程にきつく組んでの祈祷を行つていた。

「そんなお祭りあつたんだ。いいね、行こうよ」

彼がニッコリと笑う。

やつやつやつたあああああああ～～～～！～

心の中でガツツポーズ！ 表情も素直にほころんでいる。

あー、全てがわたしの想ひてる通り進んでるわー。ひょ、ひょつとしたら、今夜のこのデーターがうまくこいつ、付き合うだなんてことない！ あああああ～～！

もうなんていうか彼のオーケーの言葉に舞い上がってしまった。

「待ち合わせはいつどこにする？」

彼の言葉に舞い上がっていた頭が我に戻る。

そつか、待ち合わせ時間とか考えてなかつた。今から行つてもまだ出店とか準備中だらうし、それに夜の方が雰囲氣でるもんね。

「じゃあ、六時に祓木神社の鳥居の前でいい？」

「わかつた。じゃあまた後でね」。俺ちよつと用事があるから

「うん！ じゃあ六時こ～」

わたし達はお互に手を振つて、一時別れた。

さつて、わたしも帰つてシャワー浴びて浴衣着よ～～つと！

自然と鼻歌とか歌いながら、帰りの支度をしだした。その時、わたしの肩にポンと手が乗る感触が。

何気なく振り返るわたし。そこにはいたのは…………。

ゲ
。

「御堂
はるか……」

わたしの目に入ってきたのは、どうからどう見ても隣のクラス1
-3の住人『御堂 はるか』だった。

もしかして、今の見られてた…………？

ほつペが引きつるわたしを目の前に彼女は、その腰まで伸びる黒くて長い髪をかき上げると、ビシッとわたしに人差し指をつき付けた。

「見～ま～したわよおおおおお～～～おおつーーー。」

「ハハハ、やつぱり見られてた。

わたしは恐れていた最大の問題に見事に直面してしまった。

彼女『御堂 はるか』は宇宙ステーションからシャーペンの芯ま

でありとあらゆる物を扱っている日本最大企業『M+D』の一人娘なのだ。その容姿も端麗で、いろんな行動が花に譬えられる程にキレイ。けど、背が低いつてのがあって、そのキレイさはそのまま可愛さになってしまっている。

それで彼女が自「」中のワガママ女で、とおおお～～ってもいけすかない女～～！とかいうのなら、わたしもそれなりの態度で接すればいいんだけど、そういうわけではない。むしろ彼女はその逆、とても礼儀のなっているお嬢様なのである。

御堂家はかなりの名家だから、礼儀作法はしっかりと仕付けられてきたようだ、先生にはもちろん、生徒にもとても礼儀正しい。そしてそういう人にはやっぱりカリスマ性みたいなものがあるのか、彼女もわたし同様今年入学したばかりの一年生なのに多くの生徒が彼女を慕っている。将来の生徒会長と言う人は少なくない。

それで、そんな彼女の何が私の中で問題なのかといつと……。

えつと……わたしに思いを寄せているらしい……。

「どういう事ですの、ひよの！？ 今日の午後は用事があるんじゃなかつたんですねの！？」

「いや～、ほら、だから、わたくしがその用事なのよ

わたしよりも背の低い彼女はしかし、鼻の頭がくつつきやうなくらうに顔を近づけて迫る。

「そんな…………そんな用事私許せませんわっ！――」

……いや、あなたに許してもいい事じゃなし……。

「じゃ、じゃあ、はるかとは今度遊ぶからね、今日ばかりねー。」

とにかくこの場を逃げ切りたかったわたしは、適当に約束を作る
と、彼女に手を振つて背を向けた。しかし、

「やうなこきませんわー。」

はるかの右手がわたしの腕を掴む。

「私も今日の『祓木祭』にひよのをお誘いしようと思つてました
よー。それをあんな男に取られてもものですかー。」

彼女の言葉にわたしは教室の入り口へと向かう爪先を、もう一度
はるかへと向きあわせた。

「ちよっと、あんな男つて水原君の事…………？」

「そ、そりですわよ。」

急にわたしの態度が変わつて、はるかは一瞬ひるんだけど、その
言葉を撒回はしなかつた。

「どうして、はるかに水原君の事をどうひいて聞くのよー。」

わたしの言葉に今度は、はるかが目付きを変えた。

「…………ひよのが…………ひよのがみんなに思つてるのに気付かない
男なんて、あんな男で十分ですわ！ 私は…………私はこんなにもひ

よのの事を想つて「まあのに」……悔しきじやないですの……」

声を荒げるはるか。その声にまだ帰つていらない生徒が視線を送る。
わたしも彼女の言葉に一瞬熱くなつた頭が冷やされ、今度は恥ず
かしくなつてきた。

そんなにストレートに言われたら、ねえ。

でも、だからって水原君との約束を白紙になんか出来ない。

「悪いけど、やつぱり今日は無理。どうしても譲れない」

わたしは唇をかみ締めながら、床に皿を落とすまぬかにやつぱり言葉
をかける。

顔をあげる彼女。あわ、涙まで浮かべりやつてるよ。

「分かりましたわ」

あれ？意外とあっさり引い、

「どうしても無理といつのなら、私と勝負してくださー。」

「わ……はい？！」

「え？ ちよ、ちよっと、勝負つて一体……？」

「その勝負に私が負けたのなら、今日のひよのの行動に一切口出し
はしませんわ！」

彼女の言葉にわたしはピクリと眉を動かした。

つまり、その勝負とやらではるかに勝てば後ろ髪を引かれずに、水原君とお祭りを楽しむことが出来るつて事？

思考回路が高速回転する。

……よし！　まだ六時までは十分時間はあるし、勝負を受けよう！　ここで断つたら、はるかがこの後どんな事を仕出かすか分からぬもんね。

「分かったわ。はるか、その勝負受けたげる！」

わたしの返答に彼女の口元がニヤリと動いた。

ところで勝負って一体何で勝負するんだろ？　バスケとかテニスとかかな？　運動系勝負だつたら自信があるんだけど、頭脳系勝負だとちよつと分が悪いわね……。

ここで、勝負内容を聞かずに勝負を受け入れてしまつた自分を少し後悔した。

そして、その後悔は予想を大きく上回つてわたしに襲い掛かつた。

「勝負は、今夜の『祓木祭』の縁日屋台を題材にした勝負ですわー！」

はるかのビシッと突き出した人差し指がわたしを捉える。

は、はめられた～～～！！

「ああ！ ひやんと来たわよー。」

日も傾いてきた夕暮れ時、涼しくなり始めた『祓木神社』の鳥居の前でわたしは桜の花びらの白いシルエット柄の浴衣を着込んだはるかの前に足を揃えた。深い藍の浴衣に映える朱色の帯が彼女の美しさと見事に相まって、一つの絵画みたいになつてゐる。それだけ彼女の元がいいつことなんだろうけど。

わたしは薄いピンク色の浴衣に黄色い帯の装い。下地よりもちょっと濃い目のピンクで描かれたハイビスカス柄がお気に入りなのだ。

「ありがとうございますわ。さ、時間も限られてますし、早速勝負を始めしちゃう」

縁日の開始が夕方の五時からということだったので、お祭り開始と同時に待ち合わせということになつたのだ。

水原君との約束は六時から。ギリギリの時間だけど、勝負を受けてしまつたし、もしそれではあるかとの勝負を断つたり、すっぽかしたりしたら、今日の水原君とのデートにどんなちよつかいを出して来るか分からない。ここはもう勝負に勝つて水原君との二人だけの時間を勝ち取るしかない！

わたしはハラを決め、気合を入れてやつてきたわけである。

「まずは何で勝負しようっての？』

わたしはもう向店も開店している出店を見渡して、はるかに声をかけた。

鳥居前に来る途中にも幾つもあつた色々な出店。一体なんの出店でどんな勝負をするつていうのかしら?

「いいですのひよの? 一回勝負じゃあ詰まりません。これから勝負、一勝負事にお店を変えて3本勝負2本先取した方が勝ちというのでいかがでしょう?」

「わかつたわ

「では、まず最初の勝負は、あれですわ!」

はるかがビシッと指差したその先、人影が多くなり始めた『祓木祭』の出店群の中、その暖簾には太く達筆な字でこう書かれていた。

『金魚』

「金魚すべく?」

「そうですね。縁日の定番の一つでしょうか? あの金魚すべく屋さんで一つのすくい紙で多く金魚をすべくした方の勝ちといつ単純な勝負ですか?」

わたしはその勝負内容に心躍らざるにはいられなかつた。

「主、一枚お願ひしますわ

はるかは金魚すくいの店主の前に立つと、一回分の料金四百円を渡してすくい紙をもらひて受けた。そして一つのすくい紙をわたしへと差し出した。

「え？　いいの？」

「いいんですのよ。私が勝負を切り出したのですから」

わたしは素直にはるかから申し入れを受けた。すくい紙を受け取つた。

正直あまりお財布の中身に余裕の無いわたしには嬉しい申し入れだった。

「わあ、行きますわよー。」

キリッとしたはるかの顔にわたしも口元を引き締めて、水槽の前に屈みこむ。

田の前の水槽には赤や黒のいろんな金魚が気持ちよさそうに泳いでいる。まだ縁日は始まつたばかりだからなのか、その数は多くて逆に難易度があがつている気配。

わたしは小さい頃からこの祓木祭に遊びに来ていて、金魚すくいは毎回何度もやつていて。自慢じゃないけど、金魚すくいの自己最高記録は一枚のすくい紙で一十四匹。おかげで、近所では『救い神のひよの』だなんて呼ばれてるんだから。この勝負、負けるはずがないわつ！

一人分のスペースを空けて隣で同じように屈むはるか。ちらりと見た彼女の瞳もまた自信に満ちた、うつん、勝利を確信しているかのよつた強い視線で、水槽の中の金魚達を見つめていた。

なるほどね。はるかも腕に覚え有りつてわけね。そりやそつか、じやなきや勝負に金魚すくいを挙げてくるはずがないわね。

「よーい、スタート！　ですわ！」

隣からの声が耳に届く。

よし！　初めっから本気でかかるわよ！

わたしは腕をまくると、静かに呼吸をして、水槽へと集中した。

緩やかに揺れる水面。そして狙つ金魚の動き。この一つが金魚すくいじやあポイントになつてくる。この一つを読み取つていけば、金魚は確実に獲れる。幸い、この勝負は時間制限はないから慎重に行動していける。

さあ、すくい獲つてあげるわよ！　金魚も！　水原君とのデータートモー！

わたしは自分で、金魚すくいモードに入ったのが分かつた。

「見切つたつ！　いくわよ！　必殺つつ！　！」

すくい紙を持つた右腕を前から背中に回して、腰を捻ると、わたしは水槽のある一点にのみ集中力を注いだ！

「一条の月光っ！！」

声をあげた刹那、わたしの体は線のように伸びて、しぶきを上げることなく三匹の赤い金魚が中空に打ち上げられていた。ちなみにわたしのすくい紙は湿つてさえいない。

わたしはそれらを水の入った器で受け取ると、はるかに視線を送つた。

「どう？　はるか。このわたしに金魚すくいで勝負を仕掛けた時点であなたの負けは決定してたのよ。無駄なあがきは止めたら？」

わたしの言葉にしかし彼女はその瞳の強さを弱めてはいない。むしろその強さは強大になつてきている気さえする。

「さすが私の心を射止めたお方ですわ、ひよの。ですが私諦めは悪いんですよ！　私の力、見せて差し上げますわ！　奥義っ！！」
そういうや否や、はるかはすくい紙を高く投げ上げ、振り上げた右腕を掲げたままで強く拳を作ると、それを勢い良く振り下ろした。

「トラクターピーム
反重力地帯っ！…」

彼女が腕を落とした先はなんと水槽の中。そして、その勢いで水槽の中の水が全て空中に吹き飛ばされてしまった。当然、その中を泳いでいた金魚も一緒に打ち上げられている。

「な、なんて技なの……」

水がわたし達の頭を越えるくらいの高さまで上ると、そこから

重力に引かれ始めた。その時、はるかが器を持った腕を田で捉えきれないと程の動きで瞬かせる。

刹那、水が大きな音を立てて、水槽に戻った。そして、わたしの目に入ってきたのは、はるかの器に金魚が山盛りになっていた光景だった。

「この勝負、私の勝ちですわね」

その言葉にわたしは何も反論出来なかつた。

く、悔しい…………！ このわたしが金魚すくいで負けるなんて……！ 「うん、何よつこいで貴重な一勝が失われちゃつた。水原君との『テートおおおお』……。

意氣消沈してしまつたわたし。しかしその時、意外なところから声が上がつた。

「ちょっと待つたお嬢ちゃん。成り行き見させでもらつたが、あんた達勝負してゐるね。しかも、互いに背負つものは大きいと見える」声があがつたのはわたし達の目の前。そう、金魚すくいのおじさんだつた。

「主、なんですか？ 私達の勝負に何か文句がおありでして？」

はるかがきつい視線をおじさんに送る。

しかし、おじさんはニヤリと笑つた。

「いや、文句なんかねえよ。しかしねお嬢ちゃん、あんたが勝ちだ

つていつのほかがなもんかね」

「どうこう」とですの？ 私の方が多くの金魚を獲てますわ。このまま続けければ私の勝ちは自明の理」

「たしかに、金魚の数じやああんたの方が断然に勝つている。だけどな、これは金魚すくい。今のあんたの獲り方は金魚すくいの精神に反する！」

「なつーー？」

おじさんの言葉に今度ははるかが反論出来ない様子だった。

そのおじさんは、はるかの獲った金魚に田をやると少し悲しげな視線を送りながら言葉を続けた。

「それに見てみなよ、お嬢ちゃん。そつちのお嬢ちゃんのすくった金魚は生き生きしてるだろ。それに比べてお嬢ちゃんの金魚はどう？ 苦しそうじゃあねえか」

確かにはるかのすくった金魚はギッシリ積まれている上、水に浸かっていない金魚も多数いて、苦しそう。

刹那、はるかがその場にひざまずいた。

「…………私の…………負けですわ…………ー」

がつくつと肩を落としてボソリと呟いた。

その光景におじさんは、ウンウンと強く頷いていた。

……これは？わたしの勝ちでいいのかな……？

第一勝負、金魚すくいはわたしの勝利で幕を閉じたよいつである。

「さ、気を取り直して、次の勝負と参りましょウ」

すっかりさつきの落ち込み具合は抜けていて、またもキリツとした顔がそこにはあった。

「さつきの勝負は私の負けでしたので、今度の勝負も私が決めさせていただきますわ」

「オーケー。今度の勝負は何なの？」

「次の勝負は、あれですわ！」

またもビシッと指差したその先にあるお店の暖簾には、やつぱり達筆な字体で今度は『しゃてき』と書かれていた。

「今度は射的で勝負つてわけね」

「そりですわ」

頷くはるかとわたしはその暖簾の元で足を揃えた。

店のおじさんの威勢の良い声に迎えられたわたし達。

「」の射的屋さんは、四段の棚にそれぞれ色々な景品が並んでいる。

基本のジックポライター、お菓子、ぬいぐるみ、おもちゃ、ロトロゲームソフト、そして絶対に倒れなさそうなゲームハード。品揃えは、まあよくある射的屋と同じ感じ。

はるかがまたもわたしの分のお金もおじさんへ渡して、銃と弾を借り受けた。

「ああ、ひよの、あなたからお撃ちなさいな

「」う言つたはるかは借りた銃の一丁をわたしに渡して、弾はわたしの前に置いた。

「これの勝敗の付け方は？」

「倒したものと総合の価値がより高かった方が勝ちですわ」

彼女は景品の方を見つめながら答えた。

つまり、倒し易い小物ばかりを狙つたんじゃあダメって事ね。

わたしも改めて景品を品定めする。

弾は六発。よく狙つていかない。ここは倒し易そうで、高価なゲームソフト辺りを狙つていきたいんだけど、いかんせん、あれつて後ろに支えがあるのよね。しかも結構丈夫な支えが。

小学校の頃、ゲームソフトが欲しくて、狙つては弾かれ狙つては弾かれる繰り返しを幾度となく繰り返した記憶がある。支えの存在

に気がついたのは小学校高学年の時だったかな？とにかく、あれは罠。狙うんだつたらやつぱりジッポライター辺りでしょ！

わたしは銃にコルク弾を仕込むと、一番上の段に置いてあるジッポライターに狙いを定めた。

「見せてあげるわ！ わたしの力！」

右手で引き金に指をかけて、左手で銃身を支える。銃と視線を同じ高さにしてライターに照準を合わせる。

わたしは右へ差し指に力を入れた。

「ふじのや不次の矢つ！…」

コルク弾が光線となり狙つたライターへと向かっていく。

刹那、ライターが中空に高く吹き飛ばされた。

わたしが打ち出したコルク弾が狙い通りにライターの中心点を撃ちぬいたのだ。

わたしはその後の五発もジッポライターを狙い、確実に捉えて六個のジッポライターを取つた。計一円くらいうの価値になつたんじやないかな？

「悪いわね。もうジッポライターはほとんど取つちゃつたわよ。先に撃たせちゃつたのは失敗だつたんじゃないの？」

余裕の表情を見せるわたしに、しかしさるかは、わたしよりも余

裕の表情で返してきた。

「まあ、見ていてくださいまし」

そういう彼女は銃を持つと、景品を見据えた。

はるかは何を狙つて言つんだらひ……？

しばらくして、彼女は狙いを決めたのか、銃を構えた。

刹那、彼女から凄まじいオーラが放たれ始めた！

なっ！？　い、一体このオーラは何なのっ！？

「こんな動かない標的を撃ち取るなんて、赤ん坊でも出来ることですわ！」

その言葉を紡いだ瞬間、はるかの目が力つと見開かれた。

「ピンホールショット
一点点集中つ！！」

その声が辺りに響いた直後、わたしの視界には信じられない光景が広がった。

空中に、客を引き寄せる為だけにそこに置いてあるといって過言ではない、絶対に撃ち取れるはずのない、あのゲームハード『プレイング』が浮かんでいた。

刹那、それは重力に引かれて地面へと落ちていく。

それに引かれるように、六つのコルクの弾がパラパラと落ちていた。

わたしと、当然店のおじさんが愕然とするのを横に、はるかは「ふう」と一息吐くと、構えを解いた。

「三万円程、ゲットですね」

「口りと笑う彼女。あのオーラはすでに消えているが、あたりにまだその余韻が残っている。

どうやら、わつきのはるかの業は弾を撃つて、瞬時に装弾をして発射。それを六発分すべて一瞬で行つたらしい。しかも全弾寸分の狂いも無くフレイテンション³の中心点を撃ちぬいていたのだろう。普通の六倍以上の力、だからあんな光景が生まれた。なんて凄まじい業なのよ……。

「幼い頃から叔父様にクレー射撃場に連れて行つてもらつているので、射撃には自信がありましたの」

いや、クレー射撃をしてたとしても、あんな事は出来ないと思うんだけど……。

とにかく、この射撃勝負ははるかの勝ち。これで一勝一敗のイーブンで振り出しに戻っちゃつたつてわけね。

「さ、次が最後の勝負ですわ。今度の勝負内容はひよのがお決めになつてい�ですわ」

さつきの勝ちで、すっかり勢いに乗っている様子のはるか。だけ
ど負けるわけにはいかない！「ここで負けたら、せっかく水原君と
の関係に新しい進展が起こりそうなチャンスがなくなっちゃう！
負けられないっ！！

わたしは周りの出店を見渡した。

何か、何かはるかと勝負して有利に運べそつな出店は……あつ
！あれだ！

わたしの目に留まったその出店には、色とりどりのシロップが並
び、シャリシャリと心地の良い音が氷の山を生み出していく夏祭り
に欠かせない出店の一つ。そう、夏の暑い季節には心をときめかせ
てしまう魔法の『デザート』『かき氷』屋さんが目に入ったのだ。

かき氷の早食い！この勝負ならお嬢様なはるかには不得手な勝
負に違いない！それに、かき氷はわたしの好きな食べ物でもある
し、負けるはずが無い！

「はるか、最後の勝負はあれよ！」

わたしは見つけたかき氷屋さんに指をやした。

「かき氷、ですの？」

「そつよ、かき氷の早食いで勝負よー。」

わたしは突き出していた指をそのままはるかに向けなおして、声
をあげて宣言した！

「なるほど。そろそろ喉も渇いてきましたし、ちよつといい勝負ですわ！」

よし！ 勝負成立！ ここの勝負もらったわっ！

わたしの心の中の確信を知つてか知らずか、はるかはニヤリと笑つた。

ん？ 余裕つて事なの？

「私がき氷が一番の好物です。一日に五杯くらい余裕ですもの。この勝負頂きましたわ！」

な、なんですかーーー？ 思わぬ計算違いだわ…………でも、わたくしだって、かき氷好きは誰にも負けない自信はある！ 簡単な勝負じゃなくなつたみたいだけど、この気持ちにかけて、絶対に勝つてやるんだから！

わたしとはるかは、お店の前にひつてそれぞれのかき氷を頼んだ。

「ブルーハワイーつお願いします」

「イチ両を一つお願いしますわ」

二人にかき氷が行き渡つたところで、第三勝負の幕が開かれた！

「はあ、はあ、……中々、勝負がつきませんわね……」

「はあ、はあ、…………そりね…………」

あの後、かき氷早食い勝負は全くの同時に食べ終わって、引き分けという事になつた。その後もたこ焼きの早食い勝負、りんご飴早舐め勝負、わたがしアート勝負、型抜き正確勝負、ひよこ雌雄判別勝負、等々いくつかの勝負を繰り広げただけど、熱くなつたわたし達の動きはミスを生むことは無くて、引き分けが続いた。

ふと境内に設置されている時計が目に入った。その長針はすでに10の数字に掛かっている。

わたしの視線ではるかも時計に目が行く。

「もう時間がありませんわね」

「そうね」

「のままじやあ水原君との待ち合わせ時間までに勝負が付きそつに無い…………どうにかして決着つけないと…………」

そんなわたしの焦る気持ちを察してか、はるかが口を開いた。

「次の勝負で決着をつけましょっ

「そのつもつよーー も、何の勝負をするの?」

さつきのお面をつけてなりきり勝負はわたしが決めたから、今度の勝負内容決定権ははるかにある。さあどんな勝負をしかけてくるの?

まるかはわたしの横をすうつと通り抜けると、境内の中にある、お札やお守りを売っている所へと向かった。

ん？ そんなところで何を……？

そのわたしの疑問はすぐに解かれることになった。

「これで、勝負ですわ！」

はるかが掲げたそれは……。

「おみくじ…………？」

「せうですわ。このおみくじを振って、出た自分の運勢の高かつた方の勝ちといつ勝負ですわ！」

なるほど、運も実力つか。時間がない今となつては最適な勝負ね。

「いいわー！ おみくじ勝負で決着を付けましょー！」

勝負の行方は全く分からぬ。だけど、ここで負けるよひなら、水原君と今夜一緒に遊んでも、進展が生まれなさそう気がする……。そんな杞憂を払う為にもわたしは、このおみくじではるかに勝つー！

お金を巫女さんに渡して、おみくじの箱をガラガラと振る。

わたしの運勢！ 強くあれ！ わたしに未来を拓かせてー！

強く想いながら振つていると、箱から一本の棒が出てきた。

その棒の数字は、

「ひ……！？」

四十四番。

……いやな数字引こちやつたな……。

でも、振りなおしなんて出来ない。しかたなくわたしはその数字を巫女さんに教えて、おみくじを貰い受ける。

大丈夫よ！ いくら不吉な数字だとしても、おみくじの内容とは関係ないはず！ 案外大吉とかかもしれないし……。

わたしはプラス思考のままで、おみくじを開いた。そこにあった運勢は……。

……れよひ……。

紙の中にあつた文字は、「を横にした中にメが入つてる漢字……」。

凶。

「ひよの、ついていませんわね。こればっかりせんせいもあつませんわ」

……最悪……。よつよつて、ビックリのタイミングで凶

絶望の淵に追いやられたわたし。その横ではるかもおみくじの箱を振り出した。

かなり気が楽だろうな…………。凶以外を引けば確實にはるかの勝ち。そして、長く続いた勝負の勝者もはるかで決定ということになる。うううう、水原君とのデートがああ…………。

もうなんか涙が出そうだった。そんな中、はるかが貰つたおみくじを開いた。

「一体、はるかはどんな運勢だったんだ？」
わたしと回じで凶とかだつたらいいのに……。

そんな事思つていると、目の前の彼女が急に崩れ落ちた。

？
一体どうしたんだろう？

彼女の様子を伺おうと、更に近づいた時、わたしは彼女のおみくじの内容が目に入ってしまった。

え
？
これって
？

「なんですか……！」の凶って……！」の大のついた凶ってなんなんですか……！」

はるかは搾り出すよつた声を出した。

やう。なんとはむかのおみくじにあつた運勢は、わたしよりも悪

い運勢の大凶！

つまり、この最終勝負おみくじ良い運勢だった方が勝ち勝負はわたりの勝ちって事！？

「悔しいですか?」
　　祓木祭出店勝負は、ひよのの勝ちです

はるかはその言葉を紡いた瞬間、ガッケリと頭を垂れた。

「...」

わたしは思わず大きな声を出して喜んだ。

一時間掛かつたはるかとの祓木祭出店三番勝負は、二勝一敗十引き分けという長い戦いは、運の僅かな差でわたしが勝利の女神に微笑まれた。

午後六時。涼しい夜風と心地よい御囃子につられて、多くの人が祓木祭へと足を運んでくる。わたしの前を右へ行く人、左へ行く人、何人も人の波が過ぎていった。

はあ、えいしょ～～！ 緊張してきちゃつた～～～！ わたしから誘つたんだけど、どんな顔して水原君を迎えるべきか分かんな
い！

とにかく、今まで通りに、学校の中と同じような感覚で、あんまり意識しないよつこすればへマしないはず！

頬を両手でパシパシ叩いて気合を入れる。

ふと目をやつた時計の長針は徐々に傾き始めた。

そろそろ来る頃かな？

辺りに目を配らせて、人並みの中に彼の姿がないか探してみる。

だけどそれらしい影は、ない。

用事つてのが長引いてるのかな？

放課後彼が言つてた言葉を思い出してみたりする。決して彼が来れないだなんて予想は一切考えない。考えたら現実に起こりそうで恐いもの。

その時、わたしの巾着袋が揺れた。

中を覗くと、サブディスプレイが光々としていたケータイが原因だった。いつまでも続くバイブの振動にメールじゃなくて、通話がかかってきてている事に気付く。

ケータイを開くと、そこに表示されていたのは、待ち焦がれいる相手の名前。

「水原君！」

思わず「ほれの顔を眞にすら意識せぬへ、慌てて通話ボタンを押して、ケータイを耳に当てる。

「もしもし…？」

「あ、水原だけぞ」

「うそうそ。どうしたの？ まだ用事が終わってない？」

「それなんだかど……」「めん… いけなくなっちゃった…」

「えつ…？」

水原君の思いがけない、思つてはいけなかつた言葉がわたしの耳を突き刺した。

「なんかアーメの特番があつたらしくて、それを今から友達と見る」とになつちやつたんだ。ほんと「めんね…」

更なる彼の言葉にわたしは凍つつく。身も心も……。

「…………あ、う、うん…………。大丈夫よ…………今日急に誘つちやつたんだし、しょ、しょうがないわよ…………うん」

言葉は出るものなの、頭の中は真つ白。

「いみんな。今度はおやんとおき合つかひ。じゃあ、今夜はほんとじーるん…」

「ううん、気にしないで。それじゃあ、また明日」

その後、耳に入つてくる機械音をわたしはしばりへ聞いていた。

……。

……。

……。

……。

……。

「うわあああああ～～～～んっ！…！」

なんで―――――？ どうしてこうなつちやうの――――！？
せつかく頑張つて勝負にも勝つたのに―――。あ――ん！！

目から涙が滝のように流れてくれる。

その時、

「可愛そつなひよの…………私が慰めてさしあげますわー！」

背中に衝撃が当たり、わたしの腰をギュッと抱きしめる細い腕が
見えた。

後ろを振り返ると、そこにま、

「えー？ は、はむかっー？」

御堂はるかがわたしの体に頬を擦り寄せていく姿があった。

「どうしてはるかがここにいるの？？ セツナ帰ったんじゃないの
？？」

「帰りましたわよ～。でも、あのおみくじを結んでいくのを忘れて
ましたので、結びに戻りましたの。そしたらひよのが泣いてるじゃ
ありませんの！ そんなひよのを抱きしめずにはいられませんわ
！」

はるかの言葉にわたしは心の中がじわっと暖かくなつた気がした。
水原君に断られちゃって、寂しかつたから、余計にはるかの存在
が嬉しいものに感じた。

「ありがと～、はるか」

指で涙を拭つて、笑顔ではるかに言葉をかけたわたし。

「う、嬉しいですわひよー！ もう一度ひよのに会えて、こんな優
しい言葉をかけられて……これもあのおみくじを結んだからです
わね」

ん？

その時、わたしの脳裏に何かが過ぎた。

もしかして！

わたしは思いついた事を確かめるべく、セツナのおみくじを再度

広げて目を通してみる。

その中の一つの運勢に田が止まつた。

「恋愛運勢…………待ち人現れず…………これだ————！」

わたしは予感的中の結果にはるかを振り放そうと動いた。

勝負に勝つた事で、すっかりこんな危なげなおみくじを結ぶのを忘れてた！ これよ！ これがいけなかつたのよ——！！

「離してはゐか―――」のねむぐゞを結ぶの―――。」

「いいえ、離しませんわ！ひよのと一緒にもつとお祭りを楽しんで、あなたのハートを今夜こそ私のものにしてみせますわ！」

螢の光が夏を運ぶ月夜の下で、お囃子と和太鼓の音の中にわたしの叫び声は消えていったのだった。

おわり～～！！

～夏祭り～ あなたのハートを今夜～こそ！（後書き）

2004年 作成
2010年 加筆・修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0384n/>

はいすくっ！

2010年10月9日22時47分発行